黒部の太陽

日本人の記録

木本正次

毎日新聞社

黒部の太陽

日本人の記録

木本正次

毎日新聞社

著者略歴

木本正次(きもと　しょうじ)　大正元年，徳島県生まれ。神宮皇学館卒。昭和10年，毎日新聞社入社，報道部長(中部)ラジオ報道部長(西部)整理部顧問(大阪)出版局参与(大阪・東京)等を歴任。現在，毎日新聞(東京)編集委員。日本文芸家協会会員。創作集に「海女と一億円」「泣女」等がある。
現住所東京都武蔵野市桜堤1丁目27ノ2

黒部の太陽〈毎日ノンフィクション・シリーズ 4〉　380円

昭和39年11月5日　第1刷
昭和39年11月30日　第2刷

著　者　木本正次
発行者　高木金之助
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町1～11
大阪市北区堂島上2～36
北九州市門司区清滝町1～902
名古屋市中村区堀内町4～1

《検印省略》

印刷・中央精版　製本・大口製本

黒部の太陽　目次

1 神話への出発 9
2 三正面作戦 27
3 市民の中で 53
4 アルプスの横穴 77
5 地の果てへ 95
6 作廊、東谷前線 117
7 白い大敵 139
8 死生一瞬 157
9 二つの破砕帯 189

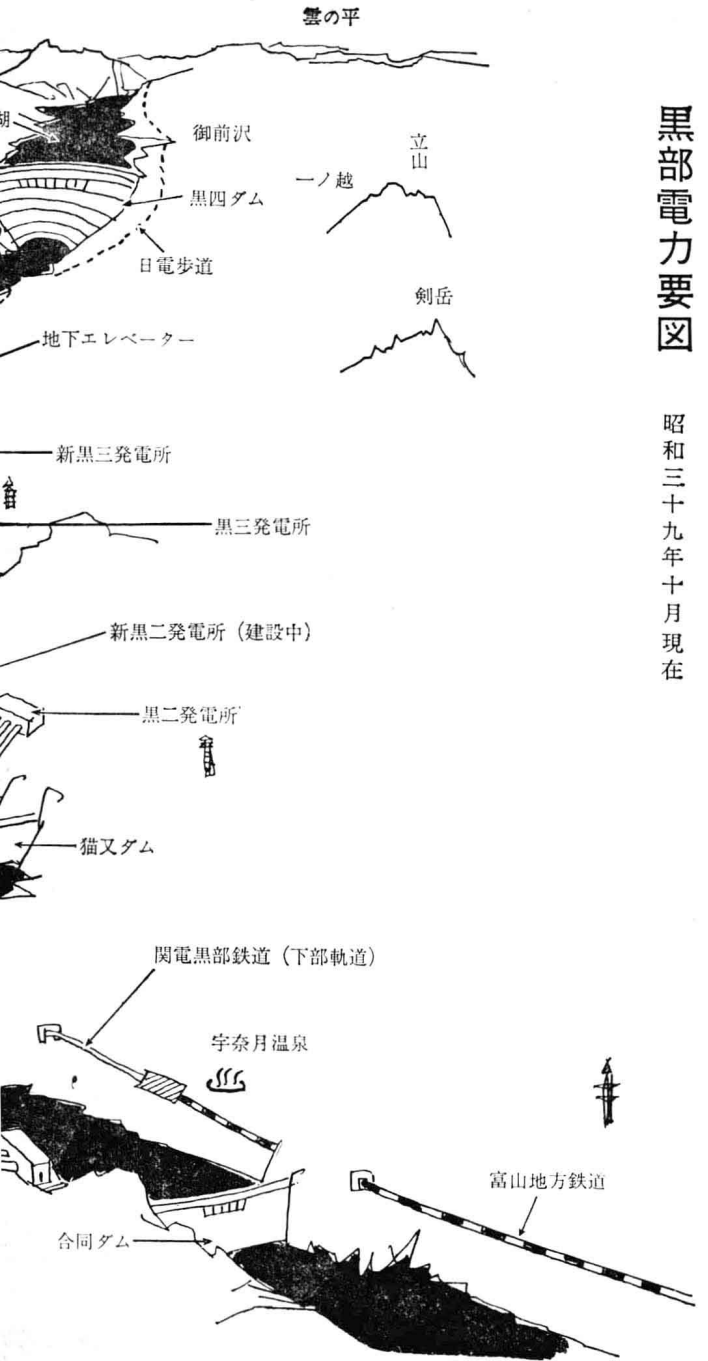
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

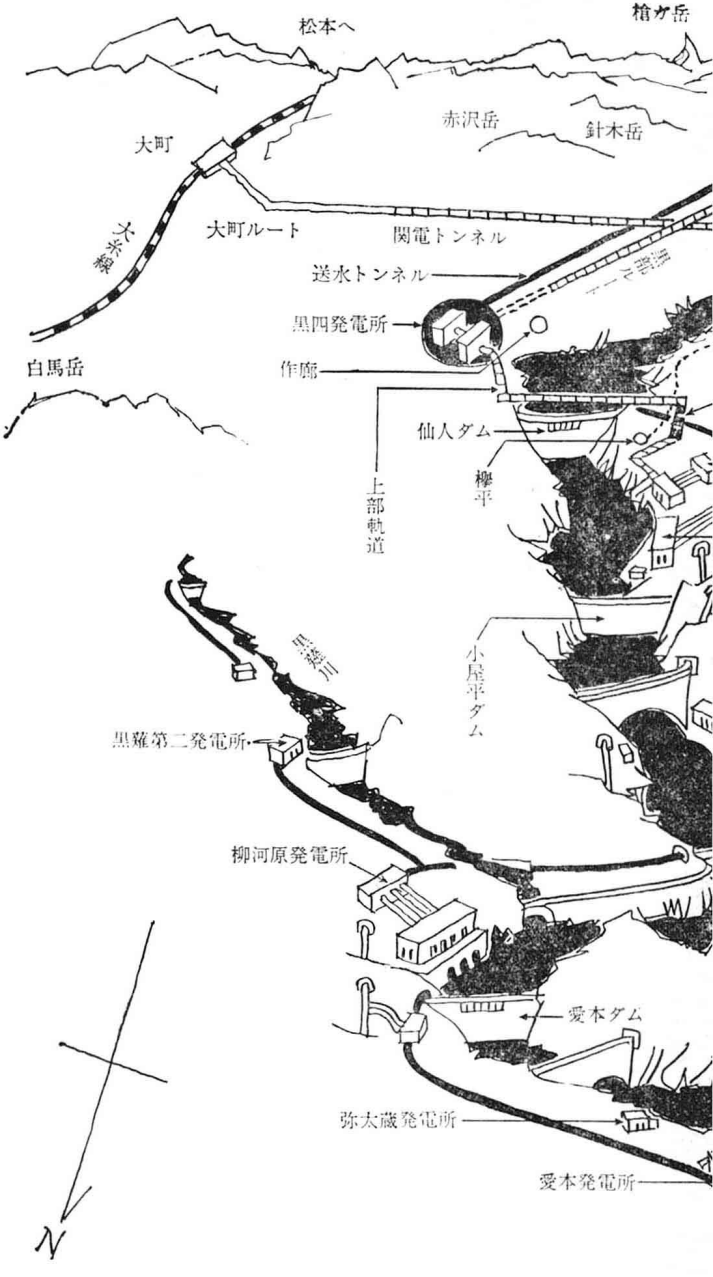
10 一本の鋲 233
11 黒四に手を貸そう！ 259
12 光あまねき陰に 273
13 水と人と 291
黒四と私 301
芦原 義重　大熊 惇　小島政二郎
三枝 知良　佐藤 欣治　杉山 紀
野瀬 正儀　平井寛一郎　船生 睦郎
紙碑への志 314
——あとがきに代えて

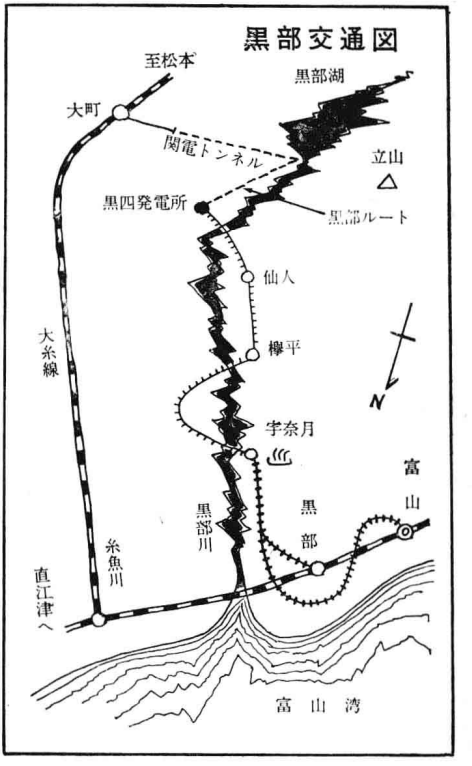
装本・挿画　土井 栄

黒部電力要図

昭和三十九年十月現在




松本へ
槍ヶ岳
赤沢岳
針木岳
大町
大糸線
大町ルート
関電トンネル
送水トンネル
黒四発電所
作廊
白馬岳
仙人ダム
欅平
上部軌道
小屋平ダム
黒薙第二発電所
柳河原発電所
愛本ダム
弥太蔵発電所
愛本発電所
N


黒部交通図
至松本
黒部湖
大町
関電トンネル
立山
黒四発電所
黒部ルート
仙人
欅平
大糸線
N
宇奈月
富山
黒部
黒部川
糸魚川
直江津へ
富山湾

黒部の太陽

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

1

神話への出発

「だいぶ晴れて来ましたなあ。芳賀さん、ぼつぼつ出かけますか――」
横に掛けていた、一行のリーダー格である本社建設部次長の吉田登が、芳賀公介を向いていった。
「そうですなあ。出かけましょう。でも何しろ足が痛うて……。川歩きなら馴れてますが、何しろ山は、えらていかんですわ」
両手で足をさすりながら、芳賀公介は、お国なまりの名古屋弁まじりで答えた。
「もう三時間近くになりますなあ。山は天気の変わりようが激しいので、ガス(濃霧)もかかる時には忽ちひどくなる代わりに、晴れるとなると、またアッという間ですわ。――そら、そこにもう立山が見え始めてますよ」
吉田はいって指さした。なるほど一面の白い雪原の上に、ごつごつした岩肌の立山が、はがねのような青黒い稜線をのぞかせて立っている。ほんの先ほどまで、五メートル先も見えなかった濃霧は、嘘のように晴れて来て、いまは薄い半透明の紗のカーテンに似た、ゆるやかな風の流れに過ぎない。
「じゃあ行きますか。これからはもう下りでしょうなあ」
重い足をさすりながら立って、芳賀はよっこらしょとリュックを背負った。
昭和三十一年六月一日。
北アルプス、立山登山ルートの頂上に近い、標高二、四三八メートルの室堂小屋である。――時刻は正午ちょっと過ぎ。
一行は三十人ばかり。中に二人の外人と、十人ほどのボッカをまじえている。ボッカとは、このあたりの言葉で強力のことである。

「あと何キロくらいあるの？」
芳賀は表に出ると、勢揃いしているボッカの一人にたずねた。
「一ノ越まで一キロ半、それから東一ノ越まで、尾根づたいにまた一キロ半だね。それから黒部川までは、下りだから楽だよ」
「じゃあ何時間くらいで着く？」
「さあ。でも旦那の足ではねえ……」
ひげづらの中年のボッカは、人の好さそうな顔だったが、
「まあ心配せんでも、へばったらおぶって上げるよ」
笑うばかりで、一向に何時間とも答えない。
（笑いごとじゃないぞ。これは、えりゃアところだ！）
芳賀は思った。きのうは富山を出て、天狗小屋で一泊した。山麓の千寿ガ原から美女平まではケーブルで、美女平から追分までは、雪をブルドーザーで掻きわけた道をジープで来たが、それから天狗平まで四キロほどは歩かされた。六月ともなると、高山とはいっても雪は緩んでいて、雪の穴に足を取られて、芳賀はそれだけで、もうへとへとに疲れたのだった。――そしてけさはまた、天狗小屋から室堂まで四キロほどを歩いて、ガスに襲われたのである。
（黒部はまだまだ遠いようだ。こんな人里離れた高山の奥の、険しい深い谷底に、一体どんなにして資材を運び、どんなにして発電所を建てるというのだ――？）
しかも自分自身が、その土木工事の責任者を命ぜられているらしいのだ。――寒さのせいばかりで

はなく、芳賀は身ぶるいした。

一行は、黒部川の上流に新しく第四発電所を建設しようとする、関西電力の技術部隊だった。

富山から立山の鞍部を越えて黒部の谷底に下り、御前沢の仮設宿舎に行こうとしているところだった。御前沢は、何年がかりかで日本で一番大きい、世界でも第四位という大アーチ・ダムを築こうとする現場で、そこにはすでに少数の調査隊員が、かなりの人数のボッカを連れて合宿している。

ボッカたちが先頭と後尾を守って、一行は道を東南に取った。

雪は、一面に白く、まだ一、二メートルも積もっている。所々に林があって、葉を落とし尽くしたダケカンバが、寒風に梢をふるわせている。

「もう一ノ越に来ました。やがて黒部川が見えますよ」

富山の北陸支社から来た技師の一人が、芳賀にいった。見上げると、稜線は雪はなく、青味がかった褐色の岩肌を露出して、すぐそこにあった。

稜線づたいに暫く行くと、急に視界が開けて来た。立ち停まって下を見下ろして、芳賀はアッと息を呑んだ。

——山が、けわしい傾斜で、一気に千何百メートルかを谷底に駈け下りていて、細く青黒く、その底に糸のような黒部川が横たわっている。

正面を見ると、黒部川を渡った対岸の空にも、立山ほどもあろう高い山々が、雪に蔽われてそびえ

ている。右を見ても左を見ても、こちら側も川の向こう側も、どちらを向いても高い山々の峰ばかりだった。それは目のとどく限り、ひしめき、重なり合い、視界の果ての雲のかなたにまで、まだも無限に続いていた。

「この鞍部が標高二千七百。ここを越えて、ボッカ便で一部の資材を富山から谷底まで運ぶんです。正面の山が針木岳、——二千八百二十です。針木の左が赤沢岳、その左が鳴沢岳で、どちらも二千七百近くあります。——これらの山の中腹に、長野県の大町市からトンネルをぶち抜くんですよ」

技師は一々指さして説明してくれる。

「赤沢のまだ左の方が鹿島槍で、唐松、鑓ガ岳、白馬岳と連らなっています。反対の右側に連らなっているのが、蓮華、三ツ岳、赤牛、薬師岳なんかです。——いわゆる北アルプスの一団の山塊で、どれも二千七百から三千メートル近い、日本最高級の山々ですよ。黒部川はこんな連山に分厚く囲まれて、まるで出口のない、すり鉢の底ですよ」

芳賀は足元の遙かに下に見える黒部川を見下ろしながら、なるほど大変なところで工事をするものだと、も一度うなった。

「この真下が黒部川の御前沢。——ダムを築く現場です。そこから右岸の地下を約十キロ、下流に向かって送水トンネルを掘って、その終点の地下に発電所を建てるんです」

技師の説明は行き届いていた。

「おや、あれは何だろう?」

芳賀が指さしてつぶやいた。その黒部川からの急勾配の雪の上を、何か細長い箱のようなものをか

ついだ男を中心に、二十人ほどのボッカが登って来るのが豆粒ほどに見える。
「ほんとに何でしょうかねえ」
芳賀の指さす方を見て、技師も首をひねった。ボッカの群も、口々に騒いでいるようだ。芳賀は何かしら不吉な予感を覚えた。

「あれは何だね？」
芳賀公介は、今度はボッカたちの方へ声をかけた。思わず高い声になっていて、それは金属性の甲高い声だった。芳賀は興奮したり大声を出したりすると、幾らかキイキイ声になる傾きがあるので、慕っている青年技師たちが『モズさん』と愛称を奉っている。——が、そんなことは本人は知らない。
「何だかまだ判らんが——」
ボッカたちの頭分らしい四十男が、ぼそッとした声で返事した。
「あの長さが気に食わないねえ」
「長さというと……？」
「担いでるものの長さだよ。あれは毛布包みらしいが、見なさい、人間の背丈くらいの長さでしょうが」
「ええッ、人間の背丈ッ？　——というと、誰かが……？」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c